

『白い巨塔』と『振り返れば奴がいる』

国際文化学研究科 川口喜治

山崎豊子の『白い巨塔』『続・白い巨塔』（1963年～1968年）は、何度も映像化されて人々に馴染みが深い。物語は、浪速大学医学部を舞台に、第一外科教授の座を狙う野心家の天才外科医である助教授・財前五郎と患者第一主義の研究者である第一内科助教授・里見脩二の友情と軋轢が軸となって展開され、財前の癌による死で幕を閉じる。ちなみにTVドラマで山本學が演じた里見に共感して医学の道を志した若者が多かったと聞く。

三谷幸喜脚本の『振り返れば奴がいる』（1993年、フジテレビ）はある事情でしばらく再放送がなされないであろうが、ドラマは、天真楼病院を舞台に、助かる見込みのない患者の延命処置に否定的立場を取る傍若無人な天才外科医・司馬江太郎と患者第一主義の外科医・石川玄との闘争を中心にストーリーが進み、司馬の刺殺（正確には生死は不明）によって終結となる。周知の通り山崎の『巨塔』にプロットを基づいたことは明白である。

さて、山崎『巨塔』では、里見の財前への対応は、友情に基づいたしばしばの忠告と、財前の野望に起因する医療過誤に対して裁判原告側の証人となったことである。一方、三谷『奴』では人権派石川の司馬に対する態度として、「徹底し且つ執拗な攻撃」が描かれる。それは司馬の医療行為を医療倫理の立場から排除しようとする意図によるものであった。

ここで、三谷『奴』特に石川の司馬に対する徹底し且つ執拗な攻撃性を視座として、山崎『巨塔』を見た場合、『巨塔』の「財前＝野望の象徴、里見＝患者第一主義」という一般的な解釈の図式が書き換えられる可能性を孕むことに、私たちは気付くはずである。

つまり、三谷『奴』における石川の司馬に対する攻撃を司馬の医療行為「自体」を阻むものであると捉えた場合、山崎『巨塔』における里見の財前への対応も結果的には財前の医療行為自体への妨害であったと意味づけることができる。そして同時に、山崎『巨塔』において財前の天才的技倆により他の外科医にはできなかった手術を受けた患者が救済されたという「財前＝野望の象徴、里見＝患者第一主義」という解釈の構図の中で見逃されていた（物語的）事実があぶり出されるのではなかろうか。財前が、また司馬が、神の手の如き技術によって困難な手術を成功させ、難治の患者の命を救ったことは否定できないのである。

私たちは、果たして「財前＝野望の象徴、里見＝患者第一主義」というふうに山崎『巨塔』の構図を単純に捉えてよいのであろうか。財前も天才的手術による難治の患者救済という「患者第一主義」側面を持ち、里見もまた財前の医療行為を妨げた、財前が命を救う機会を減殺したという意味で、自らの信念に従いそれを実現させんとする「野望の象徴」とい

う側面を持つのではなからうか。

後続のテキストである三谷『奴』は、先行のテキストである山崎『巨塔』に対して、物語の構図、意味の変容を迫るものなのである。もちろん変更を迫られた物語の構図や意味は、もともとその物語に内在されており、その潜在が解き放たれたとも考えることができるが、これは大した問題ではない。テキストの意味は、受容者の分だけ増殖するからである。

このように、「引用」は、後続テキストが先行テキストを如何に揺るがすか、如何に変容させるかにおいてその意義が問われるのである。

先行テキストを揺るがさない、変容させない引用は価値がないとも言えよう。ピカソの名言「凡人は模倣し、天才は盗む」の「盗む」はこの言いにおいてである。もっとも彼の場合は、先行テキストの価値を過小化し、自己のテキストの価値を肥大化させるのに躍起であったわけではあるが。

【追記 1】

文中に書いた山本學は、里見を好演することによって、里見の持つ医療倫理を肥大化させ、善き志を持って医療を目指す青年を増大させるという新たな意味を、山崎『巨塔』に附加したのである。

【追記 2】

あらためて、デザイナーとしてどういった価値創造したかったんだろう？この問題は、著作権、盗作などというゴシップより、その視座から論じられる必要があったのだ。



<http://nowkoko.com/wp-content/uploads/2015/07/logo0730.png>

20161130